中欧諸国民のロシア観
――最近の世論調査結果から――

石　川　晃　弘

目　　次

1. 序　　論
2. 中欧諸国とロシアの関係――その略史
3. 中欧諸国民とロシア国民の精神的・文化的差異
4. 安全保障の観点からみたロシアとの関係
5. 観察結果の中間的要約
6. 社会主義時代の評価
7. 総括――歴史記憶と小国の立場，とくにスロヴァキアについて

1. 序　　論

ヨーロッパの地図の上でちょうどその真ん中に 4 つの国がある。ポーランド，チェコ，スロヴァキア，ハンガリーである。第 2 次世界大戦が終わって間もなく東西冷戦下でヨーロッパが西と東に分断され，資本主義陣営と社会主義陣営に分かれて厳しい対立関係の中に置かれたとき，これらの国（当時はチェコとスロヴァキアは「チェコスロヴァキア」として一国をなしていた）はソ連の勢力圏に置かれて東側の陣営に繰り込まれ，「東欧」諸国と呼ばれていた。その「東欧」時代にこれらの国々の民は，自らの手による民主的国造りを求めてはその挫折の悲哀を経験してきた。1956 年のハンガリー民衆蜂起，1968 年のチェコスロヴァキアにおける「プラハの春」運動，1980 年のポーランドにおける自主労組「連帯」の出現は，現代史の中で特筆されるべき民主化運動の事件であった。これらの運動はソ連の直接介入あるいは間接干渉によって挫折させられ，その国民的規模の体験は，1950 年前後の凄惨な粛清事件の負の記憶とあいまって，人びとの中に嫌露感情を増幅させた。

やがて 1989 年の秋から冬にかけてこの地域で社会主義体制が崩壊し，1991 年には盟主ソ連自体が解体されるに及んで，「東欧」とされていたこれらの国々は「西欧」との自由な交流の扉が開かれたのを契機に，「中欧」というアイデンティティを表明するようになった。そして 1991 年にはポーランド，チェコスロヴァキア，ハンガリーの首脳がドナウ川を望むヴィシェグラード（ハンガリー）に集って協力機構の結成を決め，1993 年にはチェコスロヴァキアがチェコとスロヴァキアとに分離したのを受けてそれは中欧 4 カ国協力機構（Visegrád 4，略称 V4）となり，現在に至っている。

これら 4 カ国は 1990 年代の体制移行期における諸困難を克服し，2004 年には EU に，そして 1999 年にはポーランド，チェコ，ハンガリー，2004 年にはスロヴァキアが NATO にも加盟して，経済的にも軍事的にも欧米圏の一角をなしている。社会主義時代にはこれらの国々は COMECON（経済相互援助会議）に属して資源も市場も大部分をソ連東欧ブロックに依存していたが，いまでは経済活動が広く世界市場に及び，成功裏に発展を遂げている。国民 1 人当たりの GDP（国連統計，2017 年）でみると，世界 211 カ国の中でチェコは 50 位，スロヴァキアは 57 位，ハンガリーは 70 位，ポーランドは 71 位，つまりいずれも上位 3 分の 1 の国々の中にある（ちなみにアメリカは 12 位，日本は 31 位，ロシアは 77 位）。

社会主義体制から脱して30年を経た今日，かつて宗主国ともいうべき影響力をふるっていたロシアに対して，これら中欧の諸国民がどのような見方をしているか。中欧諸国は資源と市場の一部をロシアに依存しながら，東方（ロシア）からの脅威に備えて今ではNATOに加盟している。そこに住む人びとは今日，ロシアに対してどのような態度を示しているか。ロシアに関わるその歴史的体験を辿るとともに，最近の各種世論調査に表れたロシア観をサーベイしながらこの点を探ってみる。

2．中欧諸国とロシアの関係——その略史

中欧は国によって濃淡の差はあるとはいえ，その地政学的位置から，長年，西のゲルマン勢力圏と東のロシア勢力圏の狭間にあって，苦難の歴史を歩まされてきた。中欧諸国民のロシア観をみていくうえで，まず，近世から現代にかけての中欧各国とロシアとの関係史の中で，人びとの歴史記憶として今日なお生きている諸事実を選択的に抽出し，その要約を述べておきたい。

(1) ポーランド

16世紀後半には「ポーランド・リトアニア連合王国」を築いてヨーロッパで1，2位を競う広大な範域を占めていたポーランドは，18世紀になると諸外国からの干渉と国内での内紛で勢力を弱め，その国土は隣接する列強ロシア，プロイセン，オーストリアに分割支配されて，同世紀の末には消滅した。19世紀初めにはナポレオン戦争を契機に一時的に独立国が打ち立てられたが，ナポレオン失脚後，ポーランドの主要部分（中部と東部）はロシア帝国の一部とされた。これに対して貴族・市民・農民らによる独立蜂起が企てられた（1830年，1863年）が，すべて完全に鎮圧された。これによって，多数の人びとが処刑あるいは流刑された。

第1次世界大戦後にポーランドは独立主権国となったものの，第2次世界大戦勃発の直前にドイツ（ナチス）とロシア（ソ連）との密約によって国土を東西に分割され，その直後ドイツは一方的にポーランドに侵攻してその国土を占領下に置き，さらにソ連に軍を進めた。他方，反撃に出たソ連軍はナチス・ドイツからの「解放」の名のもとにポーランドに進入し，ポーランド全土は熾烈な独ソ戦の舞台となった。その間に国内で自由と独立を求めて闘っていたポーランド軍人やパルチザン市民の多くはドイツかソ連の捕虜となり，ソ連軍に捕えられた将兵は強制収容所送りとなった。大戦中にソヴィエト内務人民委員部が執行した「カティンの森」での膨大な数[1]のポーランド軍将校らの射殺事件は，ロシアに対するポーランド人の負の記憶を増幅するものであった。

大戦末期にソ連軍の後ろ盾で打ち立てられた左翼系新政府が戦後の国家権力を担い，1952年に共産主義政党の独裁体制が打ち立てられ，ポーランドは完全にソ連の勢力圏に組み入れられた。ポーランドには貴族層の誇り高い精神を底流とした西欧志向の文化的伝統と自負心に支えられた根強い民族意識，広く一般民衆に受容された敬虔なカトリック信仰があり，それらが結晶して国民の精神構造の核をなしていたが，ソ連の影響下でこの社会に持ち込まれたプロレタリア文化，インターナショナリズム，唯物主義と反宗教措置は，この国の精神に亀裂と葛藤をもたらした。それが社会主義的経済運営の非効率性に対する抗議とあいまって，1956年，68年，70年，76年と，体制の修正を求める市民・労働者・知識層の運動をもたらし，80年には自主労組「連帯」の出現によって体制そのものを揺るがすものへと展開した。この状況は翌年12月に発せられた戒厳令で表面的には収拾されたが，共産党と「連帯」の確執は社会主義体制が終焉する1989年まで続いた。この間の地下活動を支えた意志の核には，「ソ連による押し付け」に対して「ポーランド自身の道」を求める強い自立志向，そしてポーランドは東方ブロックの一角ではなく，西方世界の一員だという伝統的な西欧帰属意識をみてとることができる。ちなみに19世紀

にチェコやスロヴァキア，さらにはバルカンのスラヴ系諸民族が自立を目指したとき，その精神的拠り所としたのは主として東方を指向したスラヴ帰属主義の思想であったが，ポーランドではその思想的影響は稀有であった。

(2) チェコとスロヴァキア

第２次大戦以前におけるチェコ人やスロヴァキア人のロシアとの関係は，ポーランドの場合と異なって，支配と従属，抑圧と抵抗の歴史を伴っておらず，彼らの主要な関心は西方からのゲルマン勢力による支配（スロヴァキアの場合はマジャールによる支配）に対する解放と自立に向けられていた。チェコでは15世紀のヤン・フスによる宗教改革に端を発したカトリック側のハプスブルク帝国（オーストリア）・対・プロテスタント側のチェコ人（貴族層および平民諸層）の緊張関係が，政治面にとどまらず社会・文化の中に構造化された。そしてハプスブルク支配に対するチェコ貴族の蜂起と戦闘（1620年）が敗北に終わった後は，政治・行政面ばかりでなく，言語・文化の「ゲルマン化」が推し進められ，チェコ語は片田舎の方言へと押しやられ，ドイツ語が都市生活を支配するようになった。それはチェコ人の民族としての消滅とゲルマン民族への同化を意味した[2)]。チェコ人はこの時代をチェコ史における「暗黒時代」と呼ぶ。これに抗するチェコ人の解放と独立の運動は固有言語の復活とそれによる「民族の再生」に向けられた。それは武器を取っての蜂起というよりも，民族固有の言語の再確立と民族色豊かな文化芸術の普及を通して，チェコ民族としてのアイデンティティを再構築し普及していく方向を辿った。スロヴァキアではハンガリー王国による「マジャール化」に対して，スロヴァキア語の確立と普及，スロヴァキア人の民族文化の振興への取り組みが展開した。チェコやスロヴァキアでの民族自立運動の主役はポーランドやハンガリーと異なって，誇り高い土着貴族層ではなく，平民出身の文人たちであった。

その運動の原点は，自らをゲルマンやマジャールではなく，スラヴとして自覚することから発している。その文脈でロシアは同じスラヴの同胞として受け入れられ，時にはスラヴ諸同胞を守護する大樹にすら喩えられ，その影響下で人びとの間に「ロシア愛」(Rusofil) の思想と心情が広がった（特にスロヴァキア)。第１次世界大戦でオーストリア・ハンガリー帝国軍の兵士としてロシア戦線に送られたチェコ人やスロヴァキア人のなかには，ロシア側に立って戦った人たちもいた。やがて第１次大戦でドイツ帝国側に立って戦ったオーストリア・ハンガリー帝国が敗北したのを契機に，1918年，チェコとスロヴァキアが合体した「チェコスロヴァキア共和国」（第１共和制）が成立した[3)]。

チェコスロヴァキアにはロシア革命を契機に少なからぬ数のロシア人が亡命し流入してきたが，チェコ社会やスロヴァキア社会は彼らを友好的に受け入れ，「1921年から政府主導の『ロシア人支援活動』が開始され，ロシア（後にソ連）からの亡命者への大規模な支援が行われた」（石川（達）2010：416）という。流入ロシア人の中には社会学者ソローキン（Pitirim A. Sorokin）など，チェコスロヴァキアの学術文化の発展に大きく寄与した人たちもいる（ソローキンはのちにアメリカへ渡り，アメリカ社会学会会長をも務めた)。

この第１共和制時代のチェコスロヴァキアは当時の世界で最高水準の民主主義制度を備え，共産党も合法政党として活動し，各種選挙で得票率10%以上を確保していた（平田 1984：18)。ところが建国後20年経った第２次大戦前夜の1938年，ドイツはこの国でドイツ人住民が多数居住するズデーテン地方を英仏伊の首脳の賛同を得て併合し，さらにその後まもなくチェコとスロヴァキアを切り離して前者をドイツの保護領，後者を自らの傘下で独立国とした。ドイツ支配下のチェコでは諸党派の地下連合による反ナチス抵抗運動が組まれ，ドイツの同盟国スロヴァキアでは終戦前年に対独

パルチザン蜂起が展開され，その中で生死をかけて闘った共産党員の活動が，戦後チェコスロヴァキア，とりわけチェコにおける共産党の評価を大いに高めた。しかもチェコスロヴァキアをナチス・ドイツの支配から最終的に軍事解放したのはソ連軍であった。西からの連合軍はプラハの西80キロあたりにとどまって動かなかった。その間プラハ市民は孤立して戦っていた。それを最終的に助けたのはベルリン陥落後に南下してきたソ連軍であった。ソ連軍によるこの「解放」は，ズデーテン地方のドイツへの割譲を容認した英仏への不信感とあいまって，チェコ人やスロヴァキア人の共感を西側よりも東側へと向けさせた。こうした状況の中で戦後まもなく共産党員は100万人に達し，終戦翌年に行われた総選挙では38%の票を得て議会で強力な勢力となり，その党首は戦後初代の大統領になった。そして共産党は1948年に社会民主党を取り込んで一党独裁の体制を確立し，ソ連をモデルとした政治，行政，経済，文化，社会の構築に乗り出し，この国はソ連ブロックの「最優等生」とさえいわれるようになり，メディアを通して，学校教育を通して，そして様々な大小の集会を通して，ソ連賛美の宣伝が繰り返された。

しかしそれは必ずしもチェコスロヴァキア国民，とりわけチェコ人の心をとらえたわけではなかった。移植されたソ連型社会主義モデルは前近代的な経済構造と未発達な市民社会という特徴を持つロシアで構築されたものであって，戦前の自由と民主主義，高い経済水準（世界で10位くらい），豊かな文化的生活を記憶するチェコ人達を満足させるものではなかった。終戦末期のチェコに進駐してきた「解放軍」ロシア兵の粗野な行為に対する失望，スターリン体制下での凄惨な粛清・監禁・監視・密告のもとでの陰鬱さ，50年代末からの経済成長の停滞と低下，官僚主義と非効率性，戦前の共和国時代における自由と豊かさの記憶の蘇生があいまって，ソ連型社会主義体制に対する「白け」感を社会の深部にまで広めた。これに対して共産党内部でもチェコスロヴァキア独自の歴史的・現実的諸条件に見合った経済と社会への改革が検討されだし，文化人からは表現の自由を求める動きが表面化して，それらが，外来モデルに代わるチェコスロヴァキアの土壌に適した独自の「人間の顔を持った社会主義」を求める運動に結晶し，1968年に広範な市民を巻き込む「プラハの春」の運動が展開した（石川（晃）2019，参照）。ところがそれはソ連を宗主とするワルシャワ条約機構軍の侵攻によって蹂躙され，その後はソ連の間接支配による「正常化」の時代が，社会主義崩壊の1989年末まで続いた。この事件を契機にソ連，さらにはロシアに対する否定的態度が人びと，とりわけチェコ人の中に急速に，そして広範に拡散した。この事件とそれに続く「正常化」の記憶が，現在のチェコ人やスロヴァキア人のロシアに対する負の意識を有意に規定しているといわれる。

(3) ハンガリー

20世紀以前のハンガリーはポーランドやチェコやスロヴァキアほどのロシアとの関わりはなかった。ハンガリーにとっての脅威はむしろバルカン半島を北上してきたオスマン朝のトルコ帝国であり，そのトルコの勢力が萎えてからはハンガリー王国の上に君臨したハプスブルグ王朝のオーストリア帝国であった。オーストリアはナポレオン戦争の際にロシアと組み，1848年にはハプスブルク支配に対して蜂起したハンガリーの愛国的貴族を帝政ロシアとともに鎮圧した。そのさい蜂起に加わったハンガリー人貴族の銃殺処刑を現場で実行したのはロシア兵で，オーストリアの将校はそれを眺めながら祝杯を挙げていたという話は，ハンガリー人の歴史記憶に残っている。

20世紀になってからは2度の大戦でハンガリーはドイツ・オーストリア勢の側に立って戦って敗れ，敗戦のたびに西欧列強による決定で広い国土を削られ，第2次大戦後は「解放軍」ソ連の占領下に置かれ，講和成立後も駐留を続けたソ連軍の影

響下で1949年に共産主義政党が権力を独占し，ソ連をモデルとした社会主義体制を取り入れた。そのソ連軍はハンガリー人民を「ファシスト」勢力から「解放」する大義名分で東方から攻め入ってきたが，その過程で兵士から市民や農民が蒙った暴行凌辱の記憶が人びとの間で広く共有された。

やがて1956年秋，現存体制に対する抗議と自国の実質的自立を求める運動が大規模に展開しだした。「東欧」戦後史上の大事件となったハンガリー事件である。これに対してソ連はワルシャワ条約機構軍を動員して武力による鎮圧を強行し，これに抵抗して死亡した市民の数は2,700人にのぼった（鹿島1979：113）。かつてオーストリアの支配下に置かれていたという事実，第1次大戦と第2次大戦ではドイツ側についたとはいえその傘下に置かれていたという感覚，そしてまた敗戦によって西欧列強が過大な賠償と広大な国土の削減縮小を決めたという経緯などから，西欧列強に対するハンガリー人の複雑な感情が一方にあったとしても，1956年のこの事件は，ソ連，さらにはロシアに対するハンガリー人の警戒感と嫌悪感を決定づけたものとされる。

しかしその後ハンガリーは経済改革を漸進的に展開して1980年代にはソ連ブロックの国々の中で経済先進国の様相を呈し，社会主義諸国の間で経済改革のモデル国として注目されるようになった。ソ連はもはや「プラハの春」鎮圧のような挙には出ず，むしろハンガリーの実験に学んで自国経済の改革に着手しだし，西側への門戸開放と国内の民主化を打ち出した（ゴルバチョフの改革）が，その過程でハンガリー人の反露的な意識が緩んだかどうかは定かでない。

3．中欧諸国民とロシア国民の精神的・文化的差異

(1) 価 値 志 向

中欧諸国民のロシア観を観察するにあたって，まず両者の国民性における差異をみておきたい。なお，以下における図表上の国名の表示ではポーランドをPL，チェコをCZ，スロヴァキアをSK，ハンガリーをHU，ロシアをRUSと略記する。

最初に用いる資料はイングルハートとヴェルツェルによる価値観国際比較調査の結果である。この調査は質問紙法を用いて世界数十カ国の国民を対象として行われ，回答内容を「伝統志向――世俗合理志向」と「生存維持志向――自己表出志向」の二軸で分析している。各軸は次の項目群から構成されている（Inglehart and Baker 2000：24）。

伝統志向・対・世俗合理志向

- 「神は私の人生において非常に重要である」か否か
- 「子供には自立や決定よりも従順と信仰を学ぶことのほうが重要である」か否か
- 「堕胎は決して正当化できるものではない」か否か
- 「私は強い民族的自負心を抱いている」か否か
- 「私は権威に尊敬心を抱いている」か否か

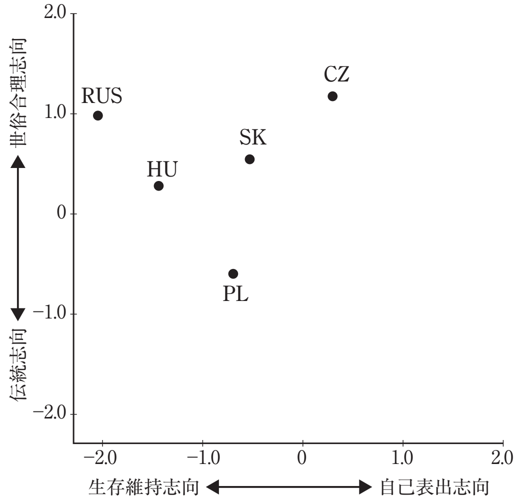
生存維持志向・対・自己表出志向

- 「私には自己表出や生活の質よりも経済的・物質的な保障のほうが重要」か否か
- 「私は自分をあまり幸せだとは思っていない」か否か
- 「私は請願に署名したことはなく，署名したいとも思わない」か否か
- 「同性愛は決して正当化できない」か否か
- 「他人に対しては信頼するよりも警戒した方がいい」か否か

2019年調査の結果から中欧4カ国の国民とロシア国民の平均的位置を図示すると，図1のようになる。なお，1990年-91年と1995年-98年の調査結果（Inglehart & Baker 2000：29）もほぼこれと同様な5カ国の位置関係を示している。

まず伝統志向―世俗合理志向の軸でみると，ロシア人の対極に位置するのはポーランド人である。

図1　中欧4カ国民とロシア国民の価値志向



出所：World Value Survey（2019）：Inglehart-Welzel Cultural map 2019 より作成

ポーランド人はすぐれて伝統志向的であり，これに対してロシア人はすぐれて世俗合理志向的である。ちなみにポーランドでは伝統的にローマ・カトリック信者が非常に多く，これに対してロシア人は20世紀に70年余にわたる共産主義のもとで唯物主義の思想で教化されていた。中欧諸国民の中で特にポーランド人は，ロシアに対する好悪感の次元とは別に，ここにみてとれるように，そもそも国民性（価値志向の次元からみた）においてロシア人との間にかなりの相違があり，両者間におけるこのような違いがポーランド人の対ロシア感情の土台にあるかもしれない[4)]。

なおチェコは伝統的に無宗教ないし無信仰の人口比がヨーロッパで最も大きい国の1つであり，ロシアとほぼ同水準の世俗合理的傾向がみてとれる。ところが生存維持志向・対・自己表出志向の軸でみると，チェコはロシアの対極に位置する。ロシアでは産業が未発達でしかも農村を飢饉が襲う時代が続いていたころ，すでにチェコでは産業が発達し中産階級が成長して，人びとの欲求水準が最低限の生存保障から自己実現を求める方向へと進んでいたとみられる。この違いがチェコ人のロシアに対する，時には正の，時には負の態度に何らかの影響を与えていると思われる。

（2）文化・精神生活の類似性・差異性

次に中欧諸国民が精神生活において自分たちとロシア人との類似性あるいは差異性をどう感じているかを問うてみる。

ここでのデータ源は中欧4カ国世論調査（Public Opinion in Hungary, Poland, Czech Republic and Slovakia; Center for Insights in Survey Research（www.IRI.org））で，調査時点は2017年3月，サンプル数はハンガリーとポーランドがそれぞれ1,000，チェコが1,016，スロヴァキアが1,024，サンプルの年齢幅はハンガリーとポーランドでは18歳以上，チェコとスロヴァキアでは18歳以上65歳以下，方法は個人面接法で，有効回答率は各国95％となっている。

まずここで観察するのは「あなたの国は次の点に関して西欧と共通ないし類似していますか，それともロシアと共通ないし類似していますか」という問に対する回答分布で，回答選択肢として「1. 西欧と共通，2. 西欧に近似，3. どちらともいえない，4. ロシアに近似，5. ロシアと共通」の5つがあげられている。そのうち，1と2を合わせた回答比（西欧と共通・近似）と4と5を合わせたそれ（ロシアと共通・近似）を示すと，表1のようになる。

この表をみると「ロシアと共通・近似」はどの国においても「西欧と共通・近似」を下回っており，文化的・精神的生活面では自国を西欧の一部とみる者が多数を占めている。つまり中欧のどの国民も多数は，文化的・精神的生活において自国を西欧の一部とみなしているとみることができる。とくにそれが顕著なのはポーランド人とチェコ人である。なおハンガリー人においては「どちらともいえない」という回答が少なくない。

表１　文化的・精神的生活における自国と
ロシアまたは西欧との共通・類似性

	ロシアと共通・近似 (4+5)	西欧と共通・近似 (1+2)
PL: 文化・知的生活	8%	56%
道徳・価値	9%	53%
CZ: 文化・知的生活	9%	57%
道徳・価値	14%	47%
SK: 文化・知的生活	12%	49%
道徳・価値	12%	48%
HU: 文化・知的生活	17%	37%
道徳・価値	23%	33%

（3）地域帰属意識

次いで，自国が位置しているのは西側か，それとも東側か，という，中欧諸国民の東西いずれかへの地域的帰属意識を問うてみる。表２は「われわれはどこに位置するか」という設問に対する回答の分布を示している（資料：GLOBSEC Trends 2018）。

この表をみると，ポーランド，チェコ，ハンガリーでは「東側」帰属意識を持つ者は５%以下にすぎず，「西側」帰属意識の持ち主が40%前後にのぼり，「中間」という回答も少なくない。そのうちチェコでは「中間」という回答が多いが，若年層だけをみると「西側」帰属が60%近くを占める。ハンガリーでも「中間」が少なくないが，若年層だけだと「西側」帰属が70%近くにのぼる。これら３カ国と異なる回答分布を示しているのはスロヴァキアである。この国では「東側」帰属意識の比率が他の３カ国よりやや大きいとはいえせいぜい10%を僅かに上回るだけであるが，その一方で「西側」帰属意識の持ち主の比率は約20%に過ぎず，過半数は「中間」と答えている。なおポーランドでは全サンプルの回答分布だと「西側」が多数を占めているが，若年層だけを取り上げてみてみると「西側」はそれほど多くはなく，むしろ「中間」が多く，チェコやハンガリーと異なる傾向が表れている。

表２　われわれはどこに位置するか（カッコ内は18～24歳）

	西側	中間	東側
PL	42 (27) %	31 (40) %	5 (9) %
CZ	38 (57) %	55 (38) %	3 (4) %
SK	21 (34) %	56 (49) %	13 (2) %
HU	45 (69) %	47 (23) %	3 (4) %

4．安全保障の観点からみたロシアとの関係

先に略述したような歴史，価値志向，地域帰属意識を持つ中欧諸国民は，今日の時点における自国の安全保障との関連でロシアとの関係をどのようにみているか。2010年代後半（ロシア–ウクライナ危機発生後）に行われた世論調査の結果を観察しながら，この点に接近してみる（資料：GLOBSEC TRENDS 2018 および Public opinion in Hungary, Poland, Czech Republic and Slovakia, 2017）。

中欧各国で「中間」地域帰属意識が相対的に多いという先にみた傾向は，安全保障と国際関係に関する各国国民の意見分布にも反映されている。

まず，自国がNATOに加盟していることをどう思うかという問に対する回答分布をみると（表３），どの国でも「よい」という回答が「悪い」を上回っているが，特にそれはポーランドとチェコで顕著であり，ハンガリーでもそれが過半数を占めている。これらの国ではNATO加盟を「悪い」という回答はわずか数%にすぎない。例外なのはスロヴァキアで，「よい」は40%に満たず，「悪い」が20%を超している。なお「どちらともいえない」という回答が各国とも少なくなく，約30～40%を占

表３　自国がNATOに加盟していることをどう思うか

	よい	悪い	どちらともいえない
PL	67%	2%	31%
CZ	65%	8%	27%
SK	37%	21%	42%
HU	56%	5%	39%

めており，中でもスロヴァキアでは40％を超えている。

この「どちらともいえない」という回答の多さは，NATO側にもロシア側にもつかずに「中立」の立場でいることを望ましいとする意見の多さと関連しているとみられる。表4にみるようにどの国でもその比率は過半数を占めている。それは特にスロヴァキアで顕著で70％以上を占め，チェコとハンガリーでは60％前後，そしてポーランドでさえ50％強をなしている。

ところで各国で「中立」志向が多数を占めている中で，ロシアとの関係についてはどのようにみられているか。表5はヨーロッパの安全保障においてロシアは「脅威」かあるいは「パートナー」かについての意見分布を示している。

表4 「我が国の安全はNATO側かロシア側かの選択を強いられるよりも，中立のままでいる方がよく保障される」という意見に賛成か反対か（5段階評価）

	賛　成	反　対
PL	53%	28%
CZ	61%	34%
SK	73%	24%
HU	58%	27%

注：「わからない」という選択肢への回答の比率は表中で省略。

表5 ヨーロッパにおけるロシアの役割について，2つの意見のどちらに近いか

	ロシア脅威視	パートナー視
PL	51%	35%
CZ	36%	59%
SK	22%	75%
HU	26%	54%

注：回答選択肢
A：ロシアはヨーロッパにとって不断の外的脅威であり，強力な安全保障連合によって対峙しなければならない。（ロシア脅威視）
B：ロシアはヨーロッパの安全保障におけるパートナーと考えるべきで，ヨーロッパ安全保障機構の中に組み入れるべきだ。ロシアを締め出すことはわれわれの安全を低下させる。（ロシアパートナー視）
C：わからない。

ポーランドではロシアをパートナー視する者は35％しかいないのに対して脅威視する者が51％に上り，回答保留者は14％のみである。ところが他の3カ国ではロシアをパートナー視する者が過半数を占め（とりわけスロヴァキアでは75％！），脅威とみる者は回答者全体の30％台（チェコ）か20％台（スロヴァキアとハンガリー）にとどまる。なおハンガリーでは回答保留者が20％を占めていて，ロシアをどうみるかで意見を保留している者が5人に1人ほどいる。

先の表にみた結果との関連でいえば，チェコとハンガリーはロシアとの関係強化を肯定する意見は少ないが，ロシアの締め出しには反対意見が多いとみられ，スロヴァキアではロシアとの関係強化を肯定するとともに，安全保障のパートナーとみなす意見が多数を占める。これら3カ国に比べてポーランドではパートナー視する意見が少なく，外的脅威視する意見の方が多い。

ちなみにアメリカに対してはどうかというと（表は省略），これをパートナー視する者の比率が最も高い（60％）のは，ロシアを脅威とみる者の比率が一番大きいポーランドであり。これと対照的なのがスロヴァキアで，ここではアメリカに対して警戒心を持つものが最も多い（60％）。チェコではアメリカをパートナー視する者が51％で，ロシアをパートナー視する意見とほぼ同水準である。ハンガリーでもアメリカをパートナー視する者と警戒視する者とがほぼ同比率であるが，回答保留者の比率が4カ国中最も多い（16％）。スロヴァキアの新聞「ナーロドネー・ノヴィニ」はこの調査結果から「一般に流布している『ロシア脅威』論とは異なり，ロシアよりもアメリカのグローバル政策に脅威を抱く人が増えている。……スロヴァキアでは60％がアメリカの存在が緊張と不安を高めていると危惧し，中欧V4諸国民の多くはNATOに対してもロシアに対しても中立を支持している」と報じている（資料：NÁRODNÉ NOVINY 2017/06/02）。

なお，別な調査の結果（資料：DENNÍK POSTOJ

表6　米露に対する信頼感（「信頼感を持っている」者の比率）

	ロシアに対して	アメリカに対して
PL	9%	50%
CZ	16%	41%
SK	31%	27%
HU	17%	33%

表7　あなたは自国の利害を守るうえで次の国々との関係強化が役立つと思うか

	否定的回答	肯定的回答
PL: ドイツ	9%	60%
ロシア	32%	24%
CZ: ドイツ	11%	59%
ロシア	34%	25%
SK: ドイツ	10%	57%
ロシア	16%	43%
HU: ドイツ	10%	58%
ロシア	31%	27%

2016/05/23；SME 2016/05/23）からロシアに対する全般的な信頼感の分布をみると（表6），「信頼感を持っている」と答えた者の比率はスロヴァキア31%，ハンガリー17%，チェコ16%，ポーランド9%であり，逆にアメリカに対して「信頼感を持っている」者はスロヴァキアが最少でポーランドが最多である。つまりポーランド，チェコ，ハンガリーでは米国を信頼する者の比率がロシアを信頼する者の比率を上回っており，特にそれが顕著なのはポーランドであるが，スロヴァキアでは逆にロシアを信頼する者の比率はアメリカを信頼する者の比率を僅かながら上回っている。この点でもポーランドとスロヴァキアは対極に位置する。

ドイツとの関係についてはどうか。調査では，ロシア，ドイツ，EU，イギリス，アメリカ，中国の5カ国1地域をあげて，「自国の利益を守るうえでそれぞれの国・地域との関係強化は役立つと思うか」と問い，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「わからない」「どちらかといえばそうは思わない」「そうは思わない」という回答選択肢を設けている。表7はそのうち肯定的回答（「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」）と否定的回答（「そうは思わない」+「どちらかといえばそうは思わない」）の比率を示している（資料：Public opinion in Hungary, Poland, Czech Republic and Slovakia 2017）。

先に述べたように，中欧諸国民はかつてドイツとロシアの間で悲劇的な体験をしている。しかし今では自国利益の確保のうえでドイツとの関係強化を肯定する意見がどの国でも約60%に上り，否定的意見は10%前後にしかならない。他方，ロシアとの関係強化を肯定する意見はスロヴァキアを除く3カ国では25%前後あるが，否定的意見がそれを上回って30%強を占めている。この点で特異なのはスロヴァキアで，そこではロシアとの関係強化を肯定する意見が43%を占め，否定的意見の16%を大きく上回る。

5．観察結果の中間的要約

以上の観察結果を要約してみる。

① 国民性を「伝統志向—世俗合理志向」の尺度で測った調査によると，ポーランド人とロシア人が対極に位置し，「生存維持志向—自己表出志向」の軸でみるとチェコ人がロシア人の対極をなしている。ハンガリー人とスロヴァキア人は両者のほぼ中間に位置する。文化・精神生活の面では中欧諸国民の多数は西側または中間に位置すると自認しており，東側に一方的な帰属意識を持つ者は少ない。西側帰属意識が特に多いのはポーランドで，最も少ないのはスロヴァキアである。

② 中欧各国の国民はおしなべて自国のNATO加盟を是としているが，「NATO側かロシア側か」の選択を強いられるよりも，中立のままでいるのがよいと考えている者がどの国でも過半数を占めている。特にスロヴァキアで中立志向が多い。

③ ヨーロッパの安全保障にとってロシアは脅威か，それともパートナーかを問うと，ポーランドでは脅威視が多数を占めるが，チェコ，ハンガリー，特にスロヴァキアではロシアをパートナー視する者が多い。ロシアを信頼しているかという問に肯定的な返答をしている者は中欧のどの国でも少なく，特にポーランドは1割に満たないが，チェコやハンガリーでは16～17%，スロヴァキアではその倍近くの31%を占める。なお，アメリカを信頼しているという回答はその逆で，ポーランドで最も多く，次いでチェコとハンガリー，それが最も少ないのはスロヴァキアである。安全保障観ではポーランドはすぐれて西欧・アメリカ依存的な意見が多いが，他の国々では中立志向的意見が多く，スロヴァキアでは親ロシア的意見も少なくない[5)]。

6．社会主義時代の評価

ソ連の圧倒的影響下にあった社会主義の時代をどう評価するかということが，現代における中欧諸国民のロシア観に影響しているかもしれない（資料：FOCUS April 2018）。

表8の設問は，1989年以前の社会主義時代と今とを比べて生活がよくなったかどうかを尋ねている。

社会主義時代を振り返って，果たして生活は今の方がよくなっているかと問うと，ポーランド（70%）とチェコ（64%）では「今の方がいい」という意見が多数を占めるが，ハンガリーでは「今の方がいい」という回答は約3分の1で半分に満たず，「わからない」という回答が4割を占めている。ところがスロヴァキアではむしろ「社会主義時代の方がよかった」という意見が「今の方がいい」という意見を上回っている（41%対35%）。しかしスロヴァキアでかつての社会主義体制を肯定する意見が多いのは中高年層であり，若年層での肯定的意見はその半分である。

なお，「社会主義時代の方がよかった」という意見の理由としてあげられているのは「人々の間の連帯が大きかった」「生活は安全で，暴力的な犯罪は今より少なかった」「みんなが仕事につけて，失業がなかった」「食品が良質で安全だった」「人々は道徳に沿って行動していた」という点であり，逆に「悪かった」理由としては「外国旅行の自由が制限されていた」「自由選挙がなかった」「表現の自由が保障されていなかった」といった点があげられているという。ポーランド人とチェコ人は「表現の自由」「外国旅行の自由」「政治参加の自由」など，自由に対する欲求水準が高く，それを著しく制限していたソ連モデルの社会主義体制に対する不満，さらには伝統的なロシア的政治風土に対する違和感と批判がいまなお広く残っているとみられる。実際，特にこの2つの国民の間では，表9にみるように，社会主義体制の崩壊を「よかった」という者の比率が高い。

ちなみに，社会主義体制の崩壊を「よかった」という意見は，中欧4カ国のどの国でも多数を占

表8　1989年以前と今とをくらべ，生活はよくなったと思うか

	今の方がいい	社会主義時代の方がよかった
PL	70%	16%
CZ	64%	22%
SK	35%	41%
HU	35%	24%

注：SKの場合：社会主義肯定の意見は中高年に多く，若年層ではその半分の水準。
「わからない」という回答の比率は表中では省略。

表9　1989年における社会主義体制の崩壊をどうみているか

	よかった	悪かった
PL	74%	13%
CZ	81%	16%
SK	67%	24%
HU	62%	20%

注：「どちらともいえない」という選択肢への回答の比率は表中で省略。

めている。特にそれが多いのはチェコで，それに次ぐのがポーランドである。逆に「悪かった」という意見はポーランドで最も少なく，それに次いでチェコでも僅かである。前問での「生活は社会主義時代の方がよかった」という回答の比率は，ここでの「社会主義体制の崩壊はよかった」という回答比よりも顕著に小さいから，生活面では社会主義時代を肯定的にみている人でも，体制としての社会主義に対しては否定的だという傾向をここにみてとれる。

なお，中欧４カ国の中で「生活は社会主義時代の方がよかった」という回答比が最も小さいのはポーランドであり，「社会主義体制の崩壊は悪かった」という回答比が最も小さいのもポーランドである。これに対して「生活は社会主義時代の方がよかった」という回答比が「今の方がいい」を上回り，社会主義体制の崩壊を否定的にみる回答が４カ国中で最も多いのはスロヴァキアである。つまり社会主義の記憶と評価において４カ国中，最も批判的なのはポーランドで，その反対がスロヴァキアであるといえる。これはこれら２つの国の国民におけるロシアに対する見方の違いに照応している。

7．総括――歴史記憶と小国の立場，とくにスロヴァキアについて

中欧４カ国は共通して第２次大戦後ソ連の勢力圏に繰り込まれて70年ほどの年月を経てきたが，それ以前，とりわけ第１次大戦まではそれぞれ異なる歴史を歩み，ロシアとの関係もそれぞれ異にしていた。

ロシアに対するポーランド人の批判的傾向は，近代以前からの長年にわたるロシアによる支配と抑圧の歴史の記憶，伝統志向的な価値意識，社会主義的価値にそぐわない個人主義的・民族主義的国民性（前出注４参照）からかなり説明できると思われる。この国では第２次大戦後にソ連型の社会主義体制を布いたが，まもなくそれを修正し，集団農場化ではなく独立個人経営の方式を存続させ，1956年から60年代にかけての「雪解け」期には文化・芸術・学問の諸領域で「プロレタリア文化」のステレオタイプから脱した自由な活動を先駆けた。そしてこの国の歩みは共産党権力と自由化志向勢力との拮抗と抗争で彩られてきた。

チェコは第２次大戦後の社会主義体制確立に至るまでの歴史においてはロシアとの否定的な緊張関係はないまま，発達した産業社会と西欧的文化生活を享受しえていた。しかし大戦後ソ連型の社会主義を導入してからは経済的機能障害と文化的閉塞状態がもたらされ，それを克服すべくチェコの土壌に適合した社会再建を企てた1968年の「プラハの春」が，ソ連の武力介入で潰された。これがチェコ人の反露感情を決定づけたといわれる。

スロヴァキアでは19世紀の民族構築期に浪漫主義的スラヴィズムの思想と運動が興り，ロシアをその盟主とみる思想的潮流が知識層に広がっていた。第２次大戦末期にスロヴァキアの地で対独パルチザンが苦戦していたとき，それを助けたのはソ連軍であった。また，社会主義体制に入ってから後進地域スロヴァキアの開発が目覚ましく進み，地方の住民生活は物質的にも文化的にも顕著に向上した。「プラハの春」事件の際には諸改革が挫折させられた中で，チェコとスロヴァキアの連邦化の構想だけは実現をみてスロヴァキアの自治が大いに拡張され，反露感情の表出はチェコほどにはみられなかった。

ハンガリーでは1956年の事件で民主と自治を求める大規模な国民的規模の運動がソ連の介入で潰され，反露感情が民衆意識を支配したが，その後の政権は政治改革に手を付けず，経済に特化した改革を着実に成功させ，ソ連ブロックの経済圏だけでなく西側諸国との経済交流を広げ，80年代には社会主義諸国の中で最も繁栄した国となった。そのプラグマティックな政策手法はソ連・ゴルバチョフの手本ともされた。

中欧４カ国は1989年における共産主義権力の崩

壊とその後の体制移行期を経て現在に至っている。この間にソ連は解体され，ロシアと中欧との関係も変わった。今ではかつてロシアとの苦い体験をした世代が次第に引退し，ロシアにこだわりのない世代が多くなっている。体制転換期には振り向きもされなかったロシア語を，実用目的で競って学ぶ若者たちが各国で増えている。チェコの若い世代の間では「プラハの春」を遠い昔の話として今では気に掛けない傾向が表れている（Lyons & Kindlerova（eds.）2016：24）。

中欧各国それぞれの今日的状況を反映しながら，諸国民のロシアに対する見方が表出されている。その中で特に注目されるのはスロヴァキア人の親露観である。この点に関してスロヴァキアの世論調査研究所のジアルファーショヴァー（Oľga Gyarfášová）は日刊紙「ホスポダールスケ・ノヴィニ（経済新聞）」（2016年5月23日）で「スロヴァキア人のロシアに対する信頼はシュトゥール派におけるロシア愛[6]の名残り，第2次大戦後のスロヴァキア人の社会的経験，共産主義体制下におけるスロヴァキア農業の技術的向上の影響があろう」と述べている（HOSPODÁRSKE NOVINY 2016）。

スロヴァキアにおける親ロシア的志向は，この国の有力政治家の発言にも表れている。ロシアがクリミアを併合したとき欧米諸国はロシア制裁を決め，スロヴァキアでも大統領キスカ（Andrej Kiska）がそれを支持したが，首相のフィツォ（Robert Fico）は，クリミア併合は国際法違反だとしつつも，西側はそれによってロシアを制裁すべきではないと語っており，ロシアをスロヴァキアにとっての脅威とはみなさず，むしろ重要なビジネス・パートナーと位置付けている（Duleba 2017：72）。また，国会議長のダンコ（Andrej Danko）は2017年11月15日に招かれたロシアの国会（Duma）での演説の中で，ロシアによるウクライナへの干渉やクリミア併合には一切触れず，国際安全保障は「強いロシア」抜きでは不可能だと強調し，ロシア人もスロヴァキア人も同じスラヴの根を持つ民族同士であり，「われわれスラヴ民族は，歴史や文化だけでなく，われわれを取り巻く環境の捉え方においても，相互に密接に結びついている」と述べている（ibid：73）。

他の中欧諸国とくらべてスロヴァキアで親露的意見が少なくないという世論調査の結果を巡って，同国の有力紙SME（2019年5月1日）が「中欧4カ国の中でロシアを最も信頼し，アメリカを最も信頼していないのはスロヴァキア人だ」という世論調査結果に対する読者からの反応を，SNSで求めている。寄せられた意見の多数は親露的見解に反論している。最初に届いた意見のうち主なものをあげると，

「スロヴァキアでは3分の1の人たちが，時代遅れの元共産主義者が支配している体制を信じているというが，それは主として東スロヴァキアのことではないか。なぜなら（幸いなことに）ここブラチスラヴァ（首都）ではそのような人に会ったことがないからだ。」

「ロシア人を信じられるのは，洞窟の中で200年も生きていた者，人生で一度も書物を開いたことがない者，人生で教育と知性がある人と話をしたことがない者，人生で歴史に関して専門的なものを読んだことがない者，ロシアの収容所，スターリン，レーニン，ボリシェヴィキ，プーチンの獣性についてまったく聞いたことがない者，IQが60未満の者……。」

「ロシア文学はスロヴァキアだけでなく世界的に認められている。たしかにロシアの作家はすばらしい，だがその一方にはロシアの政治家がいる。ロシアの政治家たちはロシアの大多数の作家たちを迫害し，収容所に送り，あるいは死刑にした。」

「忘れてはいまいか，解放の時代にロシア兵がわれわれに略奪や暴行をはたらき，多くの罪なき市民を収容所に送り，それから長年モ

スクワやコメコン諸国での労苦を強い，思想改造の名目で何十万という人々を強制移住させ，1968年には我が国を占拠した。－もうたくさんだ。だけど実際30%の人たちが革新的なボリシェヴィキ主義者を信じている。これは疑えない。まあ，いいだろう。みんなロシア愛を持ってロシアを擁護してもらおう。」

ここに表出している反ロシア観は，ソ連時代のロシアに対する負の記憶から発している。このような負の記憶は，他の中欧諸国の人びとの中にも今なお生き続けているだろう。それにもかかわらず同じ中欧の中に住むスロヴァキア人の間では反露的見解が相対的に少ない。それは，第1次大戦前の民族自立運動における汎スラヴ主義，第2次大戦末期におけるソ連軍による支援，そして社会主義時代における農村生活の改善など，負の記憶を上回る正の記憶が今なお広く人びとの間で生き続けていることだけでなく，東西両勢力の間でバランスをとりながら国防と経済運営を図ろうとする，小国の地政学的配慮が国民の中で広く共有されていることからも，説明できると思われる。

1) 山本・井内（1980：190）によれば，「赤軍の捕虜となったポーランド軍将校1万5000人の行方は，1940年5月以来分らず，ソ連当局からも満足な説明が得られていなかった」という。

2) マルクスは1852年3月5日号の「デイリー・トリビューン」紙に，「ボヘミアの一部の住民がなお何世紀かのあいだドイツ語でない言語を話しつづけるかもしれないにしても，今後はボヘミアはドイツの一部としてしか存在しえない」（Luxemburg 1971：邦訳27，詳しくは『マルクス・エンゲルス』全集第8巻46-50頁）とさえ述べていた。

3) この国の初代大統領マサリク（（T. G. Masaryk）は西欧的民主主義を志向し，ロシアのボリシェヴィキ（共産主義者）に対しては批判的であったが，ロシアとロシア文化に造詣が深く，全3巻からなる大著 *Rusko a Evropa: studie o duchovních proudech v Rusku*（石川達夫ほか訳『ロシアとヨーロッパ』成文社，2002-05年）を残している。また，初代首相の座に就いたクラマーシュ（Karel Kramář）は第1次大戦前，「スラヴ諸民族の大同団結を唱え……ロシアのツァーリを首長とするスラヴ帝国の憲法を自ら立案しさえした」（石川（達）2010：326）という。

4) 一方，ロシア人の側からもポーランド人を特別視する傾向があるようだ。19世紀ロシアの革命思想家ゲルツェンは「ポーランドを滅ぼすことはできるが，これを隷属させることはできない」（Herzen 1853：邦訳223）と述べている。また，スターリンは第2次大戦終結前年の10月にポーランドの労働者党代表に向かって「共産主義はポーランド人には合わない。彼らは個人主義的すぎるし，民族主義的すぎる」と語りかけたという（山本・井内 1980：208）。

5) 参考までに2018年春時点の調査からトランプの政策を支持する者の比率とプーチンの政策を支持する者のそれをみると，ポーランドでは46対13，ハンガリーでは30対33，チェコでは27対32，スロヴァキアでは16対41で，ポーランドはすぐれてトランプ寄りでプーチン支持は僅かしかなく，その対極にあるのがスロヴァキアでプーチン支持がトランプ支持を大きく上回り，チェコとハンガリーでは両者の支持はほぼ同水準にある。

また，在スロヴァキア日本大使館「政治・経済月報」（2019年9月）によると，2019年の始めに欧州14カ国の国民を対象に欧州外交関係評議会が行った世論調査では，「米露間の対立において自国はどちらの陣営を支持すべきか」という問に対して「ロシアを支持すべき」という回答が最も多かったのはスロヴァキア（20%）で，それに次ぐのがチェコとイタリア（各9%）であり，スロヴァキアで「アメリカを支持すべき」と回答した者の比率はわずか6%にすぎなかった（「中立を維持すべき」が約65%）という。

6) シュトゥール（Ľudvít Štúr）は19世紀中葉に活躍したスロヴァキアの政治家・文人。スロヴァキア民族史上，おそらく最も著名な人物。スロヴァキア民族形成に向けて統一民族言語としてのスロヴァキア語を確立した。その思想的特徴は啓蒙主義に対する浪漫主義にあり，ローマ・ゲルマン的西欧を個人主義，合理主義，物質主義の打算的世界として否定し，それに対置して相互扶助と心情的共感を核としたスラヴ的共同世界の人間的・道徳的・精神的優位

性を強調した（Štúr 1993）。そしてこのスラヴ的共同体の構築に向けて帝政ロシアとの合併を提起し，スラヴ共通の標準文章語としてはロシア語の使用を提案した。

引用資料

Center for Insights in Survey Research, 2017, *Public opinion in Hungary, Poland, Czech Republic and Slovakia*: A Project from the International Republican Institute（Center for Insights in Survey Research: 202.408.9450|info@iri.org（www.IRI.org|@IRI-Polls））

Center for Insights in Survey Research, 2017, *Public Opinion in Slovakia*, *March 8-12, 2017*, A Project from the International Republican Institute.

DENNÍK（2016/04/20）

DENNÍK POSTOJ（2016/05/23）

FOCUS（April 2018）

GLOBSEC Trends 2018, Central Europe: One Region, Different Perspectives.（http://www.scribd.com>document>GLOBSEC_Trends…）

HOSPODÁRSKE NOVINY 2016, “Veríte skôr USA alebo Rusku? Pozrite sa, aký postoj majú k mocnostiam Slováci”, May 23.（https://www.instagram.com/hospodarske_noviny/）

NÁRODNE NOVINY（2017/06/02）

SME（2016/05/23）

SME Domov, 2019, Diskusie: Slováci najviac dôverujú Rusku, najmenej USA, Postoje sú vo V4 rôzne（Späť na článok）, May 1.

World Value Survey 2019, Inglehart-Welzel cultural map 2019（Google 検索）

引用文献

石川晃弘，2019「『プラハの春』再考」（中央大学社会科学研究所年報第 23 号）.

石川達夫，2010『チェコ民族再生運動』岩波書店.

鹿島正裕，1979『ハンガリー現代史』亜紀書房.

平田重明，1984『埋もれた改革――プラハの春の社会主義』大月書店.

山本俊朗・井内敏夫，1980『ポーランド民族の歴史』三省堂.

Duleba, Alexander, 2017, “The Janus-Face of Slovakia’s Eastern Policy in 2017”, in: *YEARBOOK OF SLOVAKIA’S FOREIGN POLICY 2017*, Research Center of the Slovak Foreign Policy Association.

Herzen, A. I., 1853, *Du dévelopment des idées révolutionnaires en Russie*（ゲルツェン『ロシアにおける革命思想の発達について』金子幸彦訳，岩波文庫，1950）.

Inglehart, Ronald and Wayne E. Baker, 2000, “Modernization, Cultural Change and the Persistence of Traditional Values”, *American Sociological Review*, Vol. 65, Number 1.

Luxemburg, Rosa, 1971, *Nationalitätenfrage und Autonomie*, Luchterhand（ルクセンブルク『マルクス主義と民族問題』丸山敬一訳，福村出版，1974）.

Lyons, Pat and Rita Kindlerova（eds.）2016, *Contemporary Czech Society*, Praha: Institute of Sociology of the Czech Academy of Sciences.

Štúr, Ľudvít, 1993, *Slovanstvo a svet budúcnosti*, Bratislava: GORA（初版 1867）.